

『荒野で叫ぶ者の声』(ヨハネの福音書 1章 19-34節) 2022.12.18.

<はじめに>いつでも世はヒーロー・救世主に注目します。ヨハネはエルサレムから離れたヨルダン川対岸の荒野でバプテスマを授けていました。ユダヤ全土から人々が彼のもとに押し寄せてバプテスマを受ける状況に、指導者たちはヨハネが何者かを探るべく使者を送ったのです。

I ヨハネへの問い掛け(19-28)

①あなたはどなたですか(19-21)

この問いに、ヨハネはまず 3 つの否定で答えます。キリスト(20)は民族的・政治的な指導者を連想させるものでしたから、明確に否定します。エリヤ(マラキ 4:5)、あの預言者(申命記 18:15)も同様の響きを持つ問い掛けですから、彼は「違います」と答えます。

②あなたは自分を何だと言われるのですか(22-23)

問い続けて引き下がらない使者に、ヨハネは預言者イザヤが言った「主の道をまっすぐにせよ、と荒野で叫ぶ者の声」(40:3)だと名乗ります。「主の御前に先立って行き、その道を整え、罪の赦しによる救いについて、神の民に知識を与える」(ルカ 1:76-77)伝令です。

③なぜ、あなたはバプテスマを授けているのですか(25)

ヨハネがバプテスマを授けて弟子を作り、やがて一団を率いて動くのでは、との疑念が質問の背後にありました。しかし、ヨハネは「あなたがたの中に、あなたがたの知らない方が立っておられます」(26、参照 14)と指し、バプテスマもその備えだと証します。

II ヨハネの証言(29-34)

①世の罪を取り除く神の子羊(29-30)

その翌日、ヨハネはイエスを指さして叫びます。子羊は罪の贖いのためにささげられる犠牲で(レビ 6:6)、イエスの十字架での代償死(イザヤ 53:10)を連想させます。世の罪(単数形)は個々の罪深い行為だけでなく罪深い状態を表し、そこからの救いを与える方です。

②聖霊によってバプテスマを授ける者(31-33)

ヨハネは罪を認めて悔い改める証しとして水のバプテスマを授けていました。しかし、罪を離れてきよく生きる力といのちは、聖霊が与えられることによって可能です。聖霊が上にとどまる方だけが、聖霊を注ぎ満たすことのできる御方です。ヨハネはそれを見たのです。

③この方が神の子(34)

神が遣わされたキリストを「神の子」と呼びます。その方はヨハネにまさる方で先におられたのに(30)、ヨハネ自身も知りませんでした(31,33)。しかしこの方を見たヨハネは証言し、人々に紹介します。これらのヨハネのことばを、人々はどのように受け取ったでしょう。

III 証言を聞いて

①二通りの聞き方

ヨハネに尋ねる人たちは、自分の知識と期待に合致するものを探し尋ねます。ヨハネは自ら知らないことを主から予め語られ、また不思議を見せられて主の語り掛けと結び合わせて、主の御計画に気付き、それを証しています。どちらの聞き方をしているでしょう。

②声に過ぎない

ヨハネは自らを「声」と紹介します。叫ぶ者ではなく、その声・メッセージにこそ注目すべきです。神からのメッセージを取り次ぐ者も声に過ぎません。大切なのは、その声が指し示す内容です。ヨハネの声は、来たるべき救い主であるイエスへと注目させます。

③やがてわかる(13:7)

ヨハネは自分の後に来られる方のことを予め聞いていました。イエスと出会った時に、これまで語られたことが本当だとわかり、力強く証します。主が語られたことが、その時にはわからないこともあります。しかし主は必ず、後で分かるようにしてくださいます。

<おわりに> アドベント(待降節)も大詰めです。すでにイエスは救い主として生まれてくださっていますが、自分と関係ある方、私の救い主として迎えているでしょうか。今も「この方が神の子である」とヨハネの叫ぶ声は響き渡っています。その証言に耳を傾けましょう。(H.M.)